

## 博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

### 寺村政男氏 「東アジアにおける言語接触の研究」

本論文は、中国近世語研究とアルタイ諸語研究を融合させた論文である。中国近世語とは主に元明清の中国語を意味し、アルタイ諸語とはモンゴル語、エベンキ語や満洲語などのツングース語、ウイグル語を含むトルコ系の言語、朝鮮語など、要するに文法構造が日本語と酷似する諸言語を意味する。

第一章では中国近世語資料に見えるアルタイ諸語が扱われる。

まず第1節は、近世の戯曲小説を中心とする資料中のモンゴル・女真/満洲・ウイグルなどの諸語に由来する語句を辞書的に配列し、それぞれの条項に「例」「集訳」「釈義」を加えたもの。解釈に際しては乾隆時代の『五体清文鑑』を初めとする多くの一次資料が活用され、従来解釈が施されてきた語句についても研究上の新たな前進を見せている。

第2節と第3節は『正統臨戎録』と『高麗史』（部分）の研究である。1449年、明の皇帝が親征先でモンゴル軍に捉えられるという前代未聞の事件が起きるが、その時、皇帝のそばにいた者が口語的な文体で記録したのが『正統臨戎録』である。また『高麗史』には明の太祖・朱元璋の言語が記録された部分がある。寺村氏は、両者にアルタイ語の影響あるいは蒙文直訳体が見られることの意味を考えつつ、多くの特徴的な語彙と文法構造を取り上げて考察を加えている。

第二章では「満洲族の漢語理解」という視点から、満洲語に訳された『金瓶梅』（明代の小説）や『西廂記』（元代の戯曲）について、様々な角度からの考察が行われる。これらの原作は白話と言われる口語に近い文体で書かれているため、時間や空間を越えた文語よりかえって難解なところがある。満洲語訳と対照することにより難解な語句の解説に新たな光を当てうる可能性がある。本論文ではそのみならず、清初満洲人による漢文化の受容や言語接触のさまざまな様相を明らかにすることも目指している。

第1節では、満洲語文献とくに『満漢合璧西廂記』を資料とした近世中国語語彙の研究である。章ごとに難解な語が検討される。元明の高度な文芸作品が、文化的にも言語類型的にも中国語と甚だしく異なる満洲語によってどれほど正確に翻訳され得たかという点も問題とされている。満洲語における誤訳の指摘が興味深い。

第2節では『金瓶梅』と『西廂記』を主な資料として、満洲旗人による翻訳の実態を詳細に跡付けている。特に作品中の俗諺を満洲語でどのように訳しているか、誤訳はないか、翻訳者はどんな人であったのか、など様々な問題が考察される。

第3節では康熙の末年から雍正年間成立と考証される『満漢合璧音注成語對待』が扱われる。『清文啓蒙』巻二や『清文指要』『庸言智旨』等と同じく満洲子弟への処世の啓蒙書であり、現代的角度からは満漢合璧の大量の会話資料と見なしうるものである。ここでは、満洲旗人の漢字音への知識の程度が分析される。音韻史の問題として音注の特徴が分析され、文法史の問題として原因理由を表す「～上頭」（～なので）が扱われている。な

お音注は後人が書き入れたものなので『満漢合璧音注成語對待』との命名は不適切である。

第四章には以上の各章に関連する論文が配されている。第1節「東アジア各民族間の言語接触と理解－漢語、モンゴル語、満洲語を中心に」では戯曲に見る漢人のモンゴル語理解、アルタイ諸語の漢語への影響、満洲族の漢語文献に対する理解度、誤訳、満洲旗人の読めなかった漢字、など様々な問題が考察されている。特に元代から近代までの用例を網羅的に検証した「～上頭」の研究は寺村氏の独擅場だといえよう。

第2節は2005年の吉林省での調査に基づく満洲族とシャーマンの研究である。ここでは、満洲族の歴史や満洲語の特徴、清の翻訳システム、アルタイ諸語と日本語の関係などを論じたのち、尼山シャーマンの物語が詳細に分析されている。

「総結」は論文全体の構成と内容を再確認したものである。

そのあとの附録部分は第三章で論じられた『満漢合璧成語對待』の全文の翻刻である。生き生きとした清代北京方言の会話が漢字で書かれ、更に満洲語訳および満洲字による漢字音がついている。語彙・文法・音韻の資料としてたいへん貴重である。今回、全文の翻刻を完成させたことは学界への大きな貢献といえよう。将来、単行本として出版の暁には、ぜひ漢語部分に標点を施し、更に満洲語部分の日本語訳(少なくとも漢語の日本語訳)を加えることをお願いしたい。

あえて本論文の瑕疵を探すとすれば、満洲語原文を日訳する際の誤りが僅かに見られること、第一章第1節・第3節および第二章第1節などが辞書的体裁を採っているため、処々に卓見がちりばめられていながら、議論が分散してしまう嫌いがあるという点などであろう。論文題目となっている「東アジアの言語接触」の問題、そしてそれらの言語間の相関関係について更に詳しくまとめて考察する章や節があっても良かったと思われる。

とはいえ、満洲語文献を使った近世漢語の研究が、音韻関係のもの以外、今まで早田輝洋氏の訳注研究を除き皆無に近かったことを思えば、本論文がその面での語彙文法研究を大きく前進させたことは疑いのないところである。寺村氏は本論文に先立ち、関連する『大清全書』（本文編と索引編）を刊行している（早田氏との共編）。本論文が、それと相俟って、今後の研究者の指針としての必読文献となるであろうことは確実である。よって本論文は「博士（文学）早稲田大学」の学位を授与される価値を十分に有すると判断する。

2006年12月9日

主任審査委員	早稲田大学教授	古屋 昭弘
	早稲田大学教授	柳澤 明
	大東文化大学講師 文学博士（九大）	早田 輝洋
	首都大学東京教授	落合 守和